



TITLE:

<書評>濱島敦俊著「總管信仰：近世江南農村社會と民間信仰」

AUTHOR(S):

水越, 知

CITATION:

水越, 知. <書評>濱島敦俊著「總管信仰：近世江南農村社會と民間信仰」. 東洋史研究 2003, 61(4): 739-748

ISSUE DATE:

2003-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155447>

RIGHT:

濱島敦俊著

總管信仰

——近世江南農村社會と民間信仰——

水越知

本書は著者濱島敦俊氏が二十年來進めてきた江南デルタ地方の民間信仰についての研究を再構成して一冊の著書としたものである。元來は個々の論文として發表されたものを基礎にしているが、最新の成果も踏まえ、さらに大きなテーマのもとに新たに編まれたものといえる。周知の如く著者にはすでに『明代江南農村社會の研究』の著作があるが、これが明末江南の水利・徭役を考察對象としたものであったのに對し、本書は同じ對象地域ながら民間信仰を軸として宋元時代から現代に至る長いタイムスパンを扱っており、その性格を異にする。ただし著者の根源的な關心は明末の鄉村社會においていかなる共同體的組織が存在したかという點の解明で前者以來一貫している。著者の述べるところでは明末江南の水利・徭役を中心とした檢討のなかからは恒常的な村落共同體關係はついに見出せず、唯一土地廟の共同祭祀においてのみ共同體的性格が顯現すると假定した。この見解は前著の最終章で問題提起的に披瀝されたものであつて、本書はいわばその實證という性格を持つ。この點で本書はまさに著者の近世社會史研究の集

大成とも呼ぶべき大著である。この大著を前にして宋代の民間信仰を研究領域とする評者にはもとより明清時代の社會經濟史的な視點から評する能力はなく、この責を負うのはいかにも無謀である。しかし本書の登場によつて多大な恩恵を受けるのは明清時代の社會經濟史、あるいは各時代の地域社會研究の分野だけではない。中國の民間信仰の研究に携わる者に與えたインパクトはこれと同様に大なるものがあり、評者も本書から多大な啓發と示唆を受けた。すでに明清社會史の側面からは評もあり、ここで民間信仰研究の側面から本書の紹介と評を試みるのも無駄ではあるまいと考え、この機會を得て著者に示教を請いたいと考える。

一

まず本書の構成を示すと左記のとおりである。

序章

第一章 神々の來歴(一)——蘇州府常熟縣

第二章 神々の來歴(二)——常州府江陰縣

第三章 鬼から神へ——總管信仰成立の契機と構造

第四章 明朝の祭祀政策と鄉村社會

第五章 商業化と都市化——宗教構造の變動

終章 信仰と社會經濟

これらのあとに本書内で引用された全一五〇條の史料の原文が附されている。主に江南デルタ地方の地方志を中心とした史料群は、明清時代の社會史研究にとつてのみならず、中國のあらゆる時代の民間信仰研究を志す者にとつては缺くべからざる史料集となるであろう。以下本書の内容を簡単に紹介したい。

序章ではまず主題と研究史として、前著からの問題意識がいかに受け継がれ、ここに結實したかが示される。水利共同体が村落共同体と相即するという従來の見解を否定し、著者自身の行った江南デルタの現地調査でもそれは確認できなかったとする。續いて『一斑錄雜述』卷七、道光二十六年、蘇州府昭文縣の抗租暴動の記事が挙げられる。この抗租鎮壓に當たつて實際の關係者の逮捕とともに常熟縣の村々の小廟に鎮座する「總管・周神・猛將・李王」の四つの神が捕縛され、城隍廟に引き出されたのである。この事件を農村社會における「神」の力を垣間見られる事例として紹介し、本編へと導入する。

第一章ではその常熟縣の四つの神について「身元調べ」、すなわち、信仰の來歴調査が行われる。ここで著者が挙げる共通點は以下の通りである。一、かつては現世に存在した姓名を有する人格神である。二、神の子孫を稱する宗教儀能者が存在する。三、宋代における封爵の傳承を有するが、ほぼ確實に後世の偽造と推定される。四、靈異説話、とくに疫病・災害・外敵からの防護などのほか、地域・時代に規定された漕運保護の説話を有している。そして著者はこれらの江南の「土神」に對する信仰を總稱して「總管信仰」と呼ぶのである。なお著者の用いる「土神」の定義は關帝や東嶽のごとき全國規模の信仰を持つ「全國神」の反對概念として對應する語であり、村落レヴェルの一定領域の信仰圏の管轄者である「土地神」とは明確に區別されるものとしている。この「土神」・「土地神」はいずれも地方志上に頻出する語であつて、從來様々に解釋されてきたが著者の解釋が妥當であらう。

第二章では弘治年間に知縣に在任した黃傳の正徳『江陰縣志』

の記載を中心に江陰縣の總管信仰について分析する。正徳『江陰縣志』は稀覯本であるだけでなく、ほかの一般の地方志に比べて異彩を放っており、ことに「淫祀」への徹底的な批判に相當部分を費やしているのである。黃傳の批判の矛先は單に淫祀へ向けられるのみならず、先行する地方志が土神の靈異説話を無批判に採録している點にも向けられる。この異常とも思える執拗さで淫祀を追及した姿勢が、はからずも一五世紀末の江南デルタにおける民間信仰の實態を描き出したとする。その結果常熟縣の土神と同様の特徵が浮かび上がる。すなわち姓名を有する人格神であること。子孫によつて宋元以來の靈異説話と封號の説話が作られたが、いずれも偽造と見られること。いずれも漕運保護の説話を有すること、である。この章ではもっぱら黃傳の言に沿つて論證が進められるが、こうした淫祀批判の記述の系譜は正統派士大夫に脈々と見られるものであり、史料としての檢證が必要となる。著者は黃傳の淫祀批判のレトリックが、南宋の陳淳が福建の淫祀を非難した「上趙寺丞論淫祀」の文章を相當に繼承している點を見出しつつも、黃傳が陳淳の述べなかつた巫の實態を詳細に言及することに注目するのである。黃傳なる人物は著者が述べるように正統的浙東學派に屬する人間であり、ことさらに淫祀批判を聲高に叫んでいると言えなくもないのであつて、黃傳の發言を全て民間信仰の實態とするのはいささか難しい氣もするが、民間信仰の性質上、批判者である士大夫層の記述によるしかないジレンマが常に存在するのも事實である。ここではむしろ黃傳の記述に民間信仰の活力を素直に感じ取るべきかもしれない。

第三章は前章までに分析した江南の「土神」たちに共通する特

徴を検證し、神として成立するに至る過程を明らかにする。江南デルタの「土神」たちは現世に生存していた人間が變化したものであり、それらが「神」へと高められる要件として著者は「生前の義行」「死後の顯靈」「王朝の勅封」の三つを挙げる。この三つは神の成立における三つの段階であり、すなわち「生前の義行」の說話（ときに悲劇的死を伴う）を有するものが第一の條件を満たすのであり、それらの中で可視的な靈驗を示すことが出来たものが無数の單なる死者「鬼」とは異なる「神」と認定される。これが重要な第二の要件となる。この段階で「神」は實質的に成立する。しかし江南の「土神」たちはほとんどの場合王朝による封號を有しており、これが第三の要件になるとする。著者はこれらの封號の傳承が多く宋・元時代に遡ることから、勅封という最高の權威付與は主に偽造にかかるとの推論を述べる。また臺灣において戦前の植民地時代に殉職した舊日本軍の軍人や警察官が今や神々の一人に列せられているという興味深い逸話も挿入されている。第二節では神々の子孫を自稱し、祠廟に據つて活動した宗教職能者、巫師の實態が描かれる。著者は黃傳の記述に現れる巫師はトランス状態に入るとともに神が取りつく「憑依型シヤーマン」であると述べる。著者は宋代の巫が民間において自らの神・憑神を有したとする中村治兵衛氏の見解を受け、明代の巫師たちは營利活動として宗教活動を行っていたため、彼らは自らの神の權威を高めるべく說話を偽造したとする。さらに第三節では江南の土神に共通して見られた漕運保護說話の成立背景を探る。すでに著者はこれらの說話を巫の偽造と斷じたのであるが、漕運保護が靈異として選擇されたのは江南デルタという地域性だけでなく土

神たちを支持した階層に由来するとする。すなわち總管神は水運の守護神とはいえ、実際には水運專業者集團ではなく農村社會に信仰基盤を維持していた點に着目するのである。このなかで元末に常熟において海神李王信仰を積極的に支持した曹氏は當地の大地主であると同時に大規模な海運業者であったことから、これらの階層の崇敬によって單純な土地神から海神へと變貌したとする。さらに「總管」の稱號も元明期に船團の指揮官に用いられた職稱に由来すると結論づけている。

第一章から第三章にいたる江南デルタの土神に関するケーススタディは土神信仰が無名の土地神から有力な神へと形成されていく社會經濟的側面を見事に描寫しており、とくに職業的宗教者たる巫の活動を「神々の子孫」「祠廟の經營者」として經濟的に捉え直した點で極めてユニークな視座を提供したと言える。中國の民間信仰において重要な役割を擔った巫について歴史學からは最近までほとんど研究がなかった。民間信仰と關わりの深い道教研究でもあまり省みられなかった分野でもある。現在宗教學・人類學も含めて宗教者としての巫やトランスやエクスタシーなどの宗教現象の研究は進展を見せているが、明清以前の社會における巫の日常的な活動狀況について、とくに經濟的側面から論じた本書の役割は大きいものがある。

第四章では、議論を大きく展開し、前章までで考察された土神信仰が明朝の祭祀體制のなかにいかに位置づけられるかを論じていく。明朝は禮制整備に關する布告を洪武三年前後に立て續けに行った。王朝最初期にこうした祭祀體系を再編することは歴代王朝が行ったが、明朝の採った施策はいわば復古的・原理主義的な

ものとして歴代でも際立っている。著者は國家が示した信仰の「當爲」と地域社會における「實態」を問題にする。第一節では國家の中樞でいかなる意思決定がなされたかを分析する。考察の端緒は洪武三年の「神號改正詔」と「禁淫祠制」である。前者は宋元以來與えられてきた神々の封號を剝奪・改正することを命じたものであって、例えば泰山は帝號を剝奪して、「東嶽泰山之神」のごとくするとした。また後者ではお定まりの淫祠に對する禁令のほか、州縣レベルでの城隍神・社稷壇以下、「祀典」に屬する人格神の祭祀が知縣に義務づけられ、郷村Ⅱ里レベルの里社壇・鄉厲壇、各戸ごとの竈神の祭祀を義務づけた。またこれに道士・僧侶が關與するのを禁止したのである。しかし洪武帝はむしろ民間信仰に親近感を持ち、儒臣に對抗する形で道士を任用した形跡さえ見られ、一連の施策は洪武帝ではなく浙東學派の儒臣たちの思想を反映したものである。こうした復古的政策が結局のところ民間の宗教・信仰活動を覆すものでなかったことを著者は州縣レベルの城隍神についても論證する。城隍神は宋元時代を経て民間主導で地域の中核的信仰となってきたのだが、明初に至って初めて國家の祭祀體系に組み込まれた。一定領域の守護神として認定され、現實の皇帝支配に照應する地方官的役割を擔うこととなった。しかし偶像否定・非人格的城隍神の強制などは實施・定着の望み得ない觀念的な干渉であったと結論づける。このなかで嘉靖年間各地に里社壇復興の動きがあったことについて、復興ではなくむしろ初めて政策の實行を模索したに過ぎないとする見解は首肯できるものである。ここで言う一定領域の管轄者という態様の城隍神―土地神のヒエラルキーはすでに宋代に民間で意識され

たもので道教經典にも明示されている。つまり民間、あるいは道教的な發想であった。これが宋代には城隍神を否定する急先鋒であった朱子學者によつて國家祭祀に制定されるに至る過程は今後研究されるべき問題であらう。

第四章の後半では土地廟とは何かを考察するが、第三節では主に文獻史料から、第四節では著者自身による現地での調査を用いて論じられる。著者はかつて費孝通の調査した吳江縣開弦村は一個の村莊に二つの土地廟を有する極めて例外的な集落であり、必ずしもこれを標準とすることはできず、むしろ清代以降の江南デルタでは複数の聚落が一つの廟を持つ形態が多かったとする。またこの土地廟を中心にして成立する地縁的社會集團の成立はどこまで遡りうるかを檢證する。文獻史料による限り、江南デルタでは社會組織はしばしば「社」と稱され、信仰・祭祀のみならず、郷村の種々の問題がこの集團によつて解決されていたとする。元代の社制・明代の里甲制、さらに清代中期の江南に施行された順莊法が基礎としたのも在來の「社」レベルの地縁的結合であった。それでは江南デルタの「社」はどのくらいの聚落から構成されていたのか。まず地方志から清代の土地廟一つにつきおよそ十數ヶ村の聚落が存在していたことを明らかにする。この領域が土地神の管轄範圍であり、文獻には「廟界」「地界」としている。ここでは文獻史學と現地調査の二つの方法論が巧みに融合されており、本書の特長をなしている。さらに詳しく検討するには大阪大學より出された調査報告書の成果を合わせ讀むのがよいであらう。

第五章では、まず第一節において十六世紀から十七世紀に江南デルタで進行した社會經濟の大變動Ⅱ商業化の展開を論じながら

明末における郷紳層の變化を説明していく。江南デルタは明代中期に至って低地開發が飽和状態となり、人口壓力・資源と人口の不均衡が生じた。江南デルタの農民たちは土地以外の投資活動に向かい、手工業を営むことによって稠密な流通ネットワークを形成していった。結果、江南デルタでは官僚身分を手にした士大夫は城居地主となつて都市に移住し、農村は富農層を一部混えつつも、量的には小農民の卓越する社會に變容した。以上は著者が長年蓄積してきた研究であるが、如上の商業化が土神信仰に與えた影響はいかなるものであつたか。漕運保護説話をもつ江南の總管信仰を支持していた郷居地主層が城居地主化するることによつて信仰の基盤は消滅した。しかしながら總管信仰自体は清代に農村部に依然残存した。これは總管信仰が新しい信仰基盤＝小農民層に相應しい靈異説話を得たためとするが、文獻史料に見當たらぬ變容過程の手がかりを著者は近年採集された「*Stone*」から得たとする。すなわち巫師たちが漕運説話に加えて、飢饉に際して國家の所有する米穀を放出して、その身は投身自殺したという「施米神」説話を作り出すことによつて總管信仰を小農民の信仰として再生したとする。その背景に江南の小農民たちが豊凶を問わず常時米を購入するようになっており、米穀の確保・米價の動向は切實な問題と化していた事情があつた。福建で著名な航海神である媽祖が一介の土神と同様の施米説話を付與された話も興味深い。また神々自身の變貌・再生と同時に神を取り圍む信仰・祭祀の構造にも大きな變化が生じた。明末以來江南デルタの市鎮に鎮城隍廟が建立されるようになる。前章で述べられたように明の禮制によつて國家祭祀體系内の城隍廟が市鎮に建てられるのは儒教的

な觀點では違法であつたが、この現象は清代にますます盛んとなることを様々の史料から明らかにする。著者は鎮城隍廟の登場は市鎮が聚落としての地位の向上に相應しい表徴を獲得したものである。すなわち明代の城隍廟はすでに都市の守護神から一定領域の行政官的な神格へ變化しており、鎮城隍廟の登場は經濟的に中心地機能を上昇させ、周邊農村（著者は費孝通の用いた「郷脚」の語を使う）に對して支配的な地位を占めるに至つた市鎮が行政中心地に擬似する位置を獲得しようという意志をもち、周邊領域の冥界を支配する行政官の地位を占めようとしたのである。こうしたことを裏づける現象として著者は郷脚所在の「社廟」「土地廟」が下位廟の地位に自らを置き、鎮城隍廟の廟會に際して、紙錢を上納し、土地神が鎮城隍廟に表敬する活動の出現を擧げる。さらには紙錢上納の行爲が「解錢糧」というように租税の上納に類似する用語で呼ばれており、また表敬行爲も「朝集」として地方官の中央への朝勤に比されている點を指摘する。これをもつて著者は中國社會の官僚制的構造を読み取るのである。

二

以上、本書の概要をまとめ、若干のコメントを加えたが、全體の構成は論點の質量ともに豊富であり、全體が緻密な連携を持っているため重厚な物語にも似た讀後感を與える。これは著者の長年にわたる膨大な史料の収集から得られた實證と構想力が卓越しているというだけでなく、著者自身がいわば足で稼いだ生の情報があふだんに盛り込まれ、その妙味を深くしているからであろう。また著者自身の社會經濟史的な研究成果を背景にしているために

一つの土神信仰といったミクロな視点から國家との関わりに至るまでの論理におれが見られないからである。しかも著者も述べるように、これらの研究方法や論點は著者によって初めて本格的に取り組まれた點も多い。これらは、數年前に著者が企圖したとおり本書において結晶化には至³つたが、著者がこの分野のパイオニアであり、しかも依然として最前線にある以上、本書も問題提起的な面が少なくないと見られる。ここでは評者の關心に従つて民間信仰研究上における本書の意義や論點について若干の検討を加えてみたい。

本書の大きな特色は徹底した現場主義にある。これは研究對象の地域を自ら現地調査するというだけでなく豊富に集められた文獻史料や地圖から地形・聚落の存在形態の復元を試みるなど、あらゆる角度からの分析は他に見られぬものである。一連の分析には實際に信仰の現場に觸れたからこそその立體性がある。江南デルタ地域が他の地域とは違つて、定期市の時代を経験しなかつたとする指摘などは、文獻による定期市に關する記事の缺如と素人でも容易に舟を扱えるという水路の利便性を實見するという、多角的分析から得た結論として説得力をもつ。低地集村地帯と微高地疏村地帯における聚落形態の相違なども文獻史料と實地調査の總合によつて明らかになつたものである。これらの知見をもたらしした著者の現場主義は、今後村落社會や民間信仰のような最も生活に密着した事象を扱う研究において、極めて有効かつ必要な方法と位置づけられるはずである。

著者は序章において本書の研究方針は中國近世史學の傳統的手法に従つて、地方志・文集・筆記類から史料を涉獵することを柱

としたと述べる。そのうえで民間信仰のごとき「郷下田間の小人の鄙事」は記述されることが極めて少ないため、*vernacular* 類の利用によつて補うものとする。本書は文獻史學による堅固な土臺の上に立ちつつも、現地調査によつて立體的な像を獲得したのである。とくに現地調査の利用という點については、著者は一九八〇年代以降、歴史學の分野から積極的に大陸のフィールドワークに取り組んできた先驅的な研究者の一人である。從來中國の民間信仰を歴史的に跡付ける場合、人類學的・社會學的な調査研究の成果をいかに文獻考證と結びつけるかという命題は様々な論者が常に論議してきたが、實地調査の結果をどこまで過去に遡及して利用すべきかについての評價は分かれており、明確な方法論は得られていない。つまりこうした口碑の利用と實證的な歴史研究の間には常に越えがたい壁がそびえている印象はぬぐえないものがある。本書の登場はこうした研究の大きな指針となるのは間違いない。ただ本書の論證方法については、なお慎重な検討を要する。

著者自身が述べるように一九世紀に世界經濟の波をかぶり、二〇世紀前半には深刻な不況による激變、また人民中國建國以來の宗教政策などによつて、すでにいく度もの構造的な社會變動を被つた後の社會から抽出されたものであるという點が指摘され、さらにインフォーマントが村の幹部層に集中したという點でも留保を示している。人々の心性の問題や村落における人的紐帶の意識などの根源的な部分における一貫性を否定するものではないが、實際上の民間信仰は社會的・宗教的な様々の點で大きな變容を遂げていることは避けられないと思われる。これらの不安を解消するのはやはり史料の補強を望むべきであつて、實際に南宋時期の道

教の儀禮が現代の臺灣南部で保存されていたことを論證した例もあり、個々の儀禮を詳細に比較するような地道な檢證を必要とするであろう。それには著者も期待を示しているように中國における民俗調査の進展が待たれるところであるが、一方で文獻史料はすでに限界に達しているかと言えば、必ずしも悲觀的な觀測ばかりでもなからう。

この點では江南デルタの地域社會が十六世紀の商業化以後、三層に分化していたとする著者の假想モデルを援用することによつても説明しうる。もともとこのモデルは著者によれば金文京氏の提示した言語の三層構造に着想を得たものとするが、金氏は最下層の完全な白話の世界に相當するのは口承文學のほか、祭祀演劇や寶卷を擧げている。翻つて本書において最下層の土地廟信仰の史料とされたのは、主に地方志という最上層に當たる文言のみの世界の史料と、最下層の白話の世界における聴取調査であつて、中間層・最下層の文獻は登場しない。殘存狀況などによつて限界はあるだろうが、祭祀演劇史料や寶卷を發掘・利用することによつて末端の農村社會の情報がさらに得られる可能性がある。

また本書のもう一つの特色をなすのは宋代から明清時代に至る民間信仰の流れを包括的に論じた時間軸の長さである。もちろん個別信仰の歴史的な追跡は從來から研究蓄積があつたし、また宋代以降の民間信仰が現代まで續くものとして一つの流れを形成していることも論じられてきたところであつたが、實際にこれほど長期的な視野に立つた精緻な民間信仰の實證はなかつたと言つてよい。本書の表題でもある總管信仰の變遷過程などは江南デルタにおける郷紳層の動向、商業化の展開と訴訟社會の出現、あるい

は國家による祭祀秩序の整備など幅廣い研究實績のある著者ならではの雄大さがある。ただし本書は究極的には明末の社會變動のダイナミズム解明を念頭に置いており、宋代から明代中期にかけての論證はそれに至る過程の分析として配置されている感否めない。例えば本書でも一章を割いて詳論された洪武初期の一連の禮制改革については、城隍廟制度の全國的な施行や改革實施に至る政界の權力闘争を浮き彫りにするなど、研究の空白を埋めるものであつたが、その評價については曖昧に残された部分がある。洪武改制によつて城隍廟が一定の領域を管轄する神格となつた點は大きな展開として論ずる一方、このとき義務づけられた里社壇などの祭祀は結局のところ「當爲」に過ぎぬのであつて實際には宋代以來の土地神が營々と祭られていたとしている。こうした御仕着せの祭祀が民間の祭祀を根本的に改變するものではないとする見方は妥當であるが、ただ個々の祠廟における廟額・封號の廢止、あるいは城隍廟を核とする末端の民間信仰統合の制度化といった國家による祭祀秩序の再編成はやはり民間の意識上での影響も少なくないのではないかと思われるが、どうであらうか。

三

さて、著者は前著からの一貫した關心として、江南デルタ地域の農民にいかなる共同體組織が存在したのかを追及してきた。そのなかで著者が見出したのが土地廟Ⅱ社の祭祀を中核とする共同關係であつた。この基層組織設定に加えて領域觀念を伴つた城隍廟と土地廟の階層構造が著者の描き出したモデルである。本書において二つの想定は結實したのであるが、これは民間信仰だけで

なく地域社會像の根幹に關わる大きな問題と言えるだろう。

第一點目の基層組織としての「社」 \equiv 「土地廟」の問題であるが、言うまでもなくかつて「社」の存在形態をめぐる議論はそのまま中國社會の捉え方に直結する問題であつた。「社」に關する論點は古代的な「社」の祭祀が衰えたと考えられる宋代以降にいかなる展開を見せたかという點であつた。にもかかわらず宗教的な「社」の役割と元代の社制に見られる行政的な社の役割については必ずしも兩者を整合的に論じられたわけではなかつた。これには古代的な「社」が宋代において斷絶し、新興の人格神が取つて代わり、それらが個別に信仰を集めたとする一般的な理解のためにそれ以後の村落における「社」の役割には關心が拂われなかつたことがあろう。この點で著者は明代以降も江南デルタでは祭祀を中心とする共同關係が持續し、それが「社」と呼ばれたことを明らかにすることで、宋代以降の人格神の登場は末端の宗教構造を根本的に變化させなかつたとするのである。そのうえで著者は自主的參加を基本とする任意團體的な「善社」と江南デルタにおける「社」 \equiv 「土地廟」とは全く異なるもの定義づける。もちろん著者自身が留保を示すように、「社」の語義は一つではないが、ここでは役割を終えたはずの「社」の祭祀共同體的な性質の繼續性を見出したことに意義があろう。また行政制度との關係としては古代以來の社 \rightarrow 元の社制 \rightarrow 明の里社の流れという卓見を示した。これは祭祀面と行政面に分裂した議論を一本化するものであり、從來の「社」の議論を大きく前進せしめる提言である。

さて著者の論じた「社」は祭祀共同體の側面を強く打ち出すものであるが、これは戦前の農村調査以降、村廟の祭祀を核とする

村落共同體の缺如という議論に對して、全く新しい視點から再考を促したものである。そもそも村落共同體の缺如と村落の共同性の缺如は同一ではない。また村落連合の共同祭祀も視野に入れればある一定領域の共同性を想定するのが妥當である。「廟界」「地界」という語を見出し、その領域を實際に示したことは注目に値しよう。「村廟」の缺如した自然村 \equiv 無廟村の存在はさらに廣い範圍の土地廟の祭祀圈が確認されたことで共同性を否定するものではなくなつた。ただし著者の議論において從來の研究に對する評價が判然としない點がかかる。例えば田仲一成氏の一連の祭祀演劇研究において、明代以降、社から發展した村落祭祀は少數の、ときに單一の有力宗族に支配され、ほとんど宗族の祠堂と同一の機能を持つに至つたとする見解があるが、村落内の特定宗族の擡頭という事態は土地神を中心とした村落共同體を想定する本書の地域社會像とは異なる像である。これに類する事象は各地の研究からも見られるものである。これは對象地域の違い、江南の特殊性ということで解決されるのか。例えば田仲氏は江蘇・浙江などの市場地の發展した地域でも祈雨などの農耕祭祀では單姓村落祭祀が残存していると述べている。また單一宗族の祠堂と至らないまでも、村落中で相對的に富裕な者が結局は土地神の祭祀の主導權を握るということは想定されないのであろうか。これは地域的な問題も含め、論證は後考を待たねばなるまい。

第二點目の民間信仰の階層構造であるが、著者のモデルを支えるのは祭祀圈と市場圈の概念である。この概念自體は古くは福武直氏・松本善海氏らによつて提起されてきた問題であり、G・W・スキナー氏のモデルが廣く知られている。著者の縣城隍廟—

鎮城隍廟——土地廟という階層的な祭祀圏モデルもスキナー氏のモデルを基礎とし、あるいは林美容氏の祭祀圏のモデルに大きな示唆を受けたとしているが、本書に示された著者の明末江南の祭祀圏モデルは經濟中心地たる市鎮が行政中心地の傘下に入るというものである。いわば經濟中心地系統と行政中心地系統の一本化ということになる。著者の想定を裏付けるのが明末以降の鎮城隍廟の登場であつて、著者は行政中心地系統で市鎮を縣城の下に置こうとする志向の表れとする。とくに鎮城隍廟に關しては、市鎮が自立的な都市として自らの宗教施設を建設したのではないことを示したとする見解は明快である。ただ本書の行論では祭祀圏の構造が城隍廟から土地神へ至る系統の議論に集約されており、いささか單純化された感がある。個人を中心に同心圓狀に廣がる祭祀圏は信仰の種類によつて様々に設定されると思われるが、全國規模の有力な信仰や聖地などの場合、祭祀の範圍（林美容氏の定義では「信仰圏」とする）は縣城の領域をはるかに越えて廣がるものである。この點でとくに言及がなかつた點が惜しまれる。假に臺灣や華僑社會などでしばしば指摘される「分香」のようなシステムが存在したとすれば、城隍廟の系統とは別系統の關係を考へることができないか。あるいは「社會」のような自主的な宗教活動との關係もこれからの検討課題とならう。

四

ここまで見てきたように、著者は、例えば市場の發展段階としての定期市の時期を経験しなかつたなどの社會的性質の相違から、江南デルタの民間信仰の構造は他の地域を對象とした諸研究及び

調査に基づく結論とは區別されるものとしている。また著者はかねてより地域による偏差を念頭に置くべきことを主張し、また各地域の研究が盛んになることによつてその比較を進めていくべきであると述べている。近年の近世地域社會史研究の深化を見るにつけ、著者の研究を本格的に用いた信仰構造の比較研究が取り組まれるのも近い將來のことであらう。その際には日本の村落社會との類似點・相違點なども改めて比較材料となると思われる。

前著の最終章では明清時代の民間信仰についての研究が寥々たるありさまであることを嘆いておられたが、二十年たった現在、民間信仰研究に携わる研究者、また研究蓄積は備わりつつある。本書の森正夫氏の序文にあるように、著者がこの研究に取り組み始めた時點では多くの地方志が日本では見ることができないなかの史料収集であつた。現在では多くの貴重な地方志が影印の形で公刊され、史料状況は格段に變化している。さらに現地で調査することも飛躍的に容易となつた。こうした状況の變化は一つの村落、一つの祠廟といったミクロ的な研究を可能にし、また實際に促進するであらう。しかし、そうしたミクロな事象をただ羅列するだけでは前近代中國の複雑な地域社會像を捉えるのは困難であり、必ずや全體的な視野からの議論が求められる。そのときに本書に結實した壯大なモデルとたぐいまれな探求心は常に我々後學を叱咤する存在となるのは間違いない。

以上、愚にもつかないことを述べてきたが、あるいは誤解や的外れな意見もあったと思われることはご海容いただきたい。しかし改めて考えると、かかる評者の問題意識は著者の研究によつて

初めて得た點が多いことに氣づかされるのである。現在の狀況は各時代の民間信仰研究の隔たりは大きく、また斷片的な研究も散見するという印象は拭えない。また民間信仰をめぐる學際的な試みも模索が始まったばかりであろう。そのなかで濱島氏の研究は大きな風穴を開けたものと言える。著者の自跋にあるごとく、本書はたしかに「前人未到の領域」に到達したものと言うべきである。後進たる我々はこの道標を得たことを喜ぶとともに新たな研究の出發點とせねばならない。

註

- (1) 本書には岸本美緒氏の評がある。『史學雜誌』一一一八、二〇〇一。
- (2) 濱島敦俊・片山剛・高橋正『華中・南デルタ農村實地調査報告書』(『大阪大學文學部紀要』三四、一九九四)。
- (3) 濱島敦俊「農村社會——覺書」(『明清時代史の基本問題』汲古書院 一九九七)において本書に見られた論點が項目ごとに論じられている。
- (4) 丸山宏「玉壇發表科儀考——臺南の道教儀禮の歴史的系譜を求めて」(『東方宗教』七七、一九九一)、田仲一成

「閩北の普度と目蓮戲——中國初期演劇史初探」(『東洋文化研究所紀要』一一七、一九九二)など。

- (5) 金文京「漢字文化圈の訓讀現象」(『和漢比較文學研究の諸問題』汲古書院、一九八八)。

- (6) 田仲一成『中國の宗族と演劇』(東京大學出版會、一九八五)。

- (7) 林美蓉「彰化媽祖的信仰圈」(『中央研究院民俗學研究所集刊』六八、一九八九)。

- (8) 分香について例として Schipper, Kristofer, "The Cult of Pao-sheng Ta-ti and Its Spread to Taiwan——A Case Study of Fen-hsiang" In *Development and Decline of Fukien Province in the 17th and 18th Centuries*, edited by E.B. Vermeer, Leiden: Brill, 1990. など参照。

- (9) 濱島敦俊「中國の郷紳」(『國際歴史學會議日本國內委員會編『歴史研究のあたらしい波——日本における歴史學の發達と現狀Ⅶ——一九八三—一九八七』第二部第九章、山川出版社、一九八九)

二〇〇一年五月 東京 研文出版
A五判 iii+三三八+四四頁 七〇〇〇圓